

2013年7月 週刊きたかみでは

うおずみ千尋詩集『白詰草序奏—金沢から故郷・福島へ』

一冊の詩集が送られてきた。清楚で美しい壮丁。詩人は、現在金沢在住で福島出身。日本現代詩人会会員・詩誌「衣」同人で、これまで、5冊の詩集を上梓した。

四章各8編で32編の詩集。「花しづく」「カノン」「道明かり」「あやとり橋」で構成した。(福島と金沢を行きつ戻りつ、宙と時間をかける風景が行き来し、詩人の精神が率直な歳月の堆積が裏付けるようだ。「あとがき」にこうある。「五十代半ばで失明してしまった私ですが(略)薄れてゆきそうな風景や色彩、それを鮮やかに甦らせ支えたのは、故郷・福島の美しい自然でした」。移ったばかりの土地で、夫も亡くし、視覚を失った詩人。混乱した思考から逞しく再起し、ハンディを受け入れ、生きていこうとする矢先の大震災と原発事故。

放射能で汚染され、生活と自然破壊が顕著になった故郷・福島。茫然自失の状態から、詩人は生きる勇気と希望を取り戻そうと詩に表現する。

まさにその意思が「白詰草の咲き乱れるクローバーの原っぱに、寝転んで夢中で遊んだあの感触を、一日も早く子供たちに味わわせてあげられますように！」の願いが充ちている。

三章の「道明かり」に「魂が駆ける場所」がある。作品の一部を紹介する。前半は福島的美しさを詠うが、中・後段は原子力を告発している。「(略)道は／福島 あの海で途絶え／無惨に炸裂したのです 幻想も神話も一瞬に吹き飛ばし／終息不能物質は／音も無く影も無く／今日に降り積もり／明日へ流れ込みました／これが夢？／これが平和 広い広い空でした／碧い碧い海でした／ふるさと その町は／今も／わたしの／魂が選るところです」

と紹介されています。